カール・ポパーの「世界 1・2・3」

英国哲学界の重鎮であるポパーは、師のシェリントンとともに現代脳生理学の基を築きノーベル生理医学賞を受賞したエクルスと共に『The Self and Its Brain（自我と脳）』[241]を著し、世界を次の三つに区分した：

《世界1》 物理的存在の宇宙；

《世界2》 意識状態、心的性向、無意識状態を含んだ心的状態の世界；

《世界3》 思考内容・人間の心の所産からなる世界。

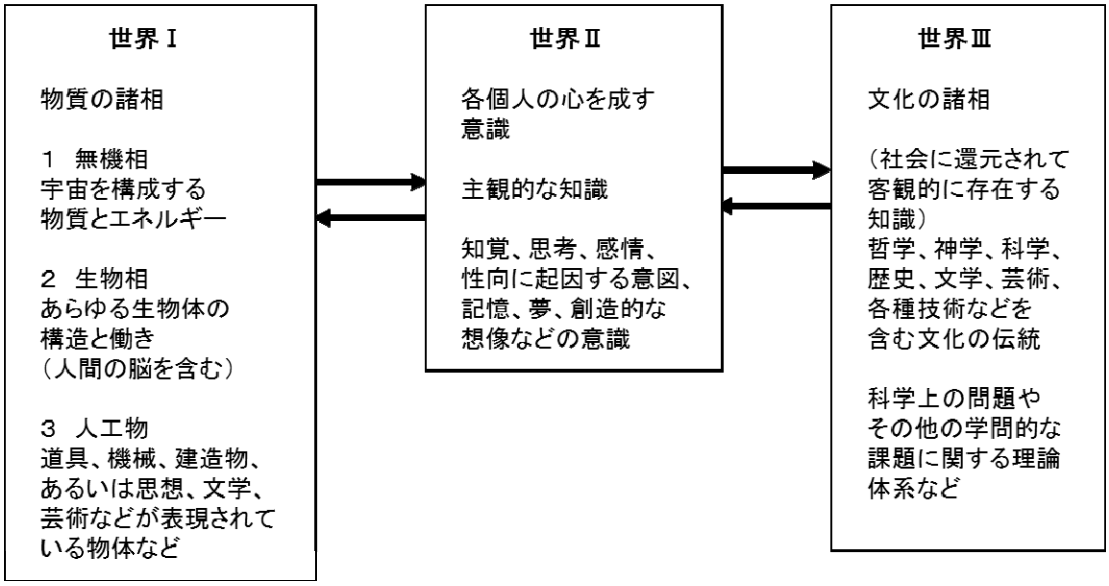
ポパーは、世界3についての考察が身心問題に何らかの新しい解明をもたらすことが出来ると考えており、その論拠として次の三つの事柄を挙げている：

i) 世界3の対象は抽象的であるが、それにもかかわらず実在的である。なぜならそれらは世界1を変革する強力な手段なのである；

ii) 世界3の対象は人間がそれらの製作者として介在することを通してのみ世界1に影響を及ぼす。とりわけ、世界3の対象が把握されるということを通して世界1に影響を及ぼす。そして、把握とは、世界2の過程、または心的過程であり、より正確には世界2と世界3が相互作用する過程である；

iii) したがって、われわれは世界3の対象と世界2の過程がともに実在的であることを認めねばならないーたとえ唯物論の偉大な伝統への尊敬から、これを認めることを好まなくともである。ポパーの、「大脳はコンピュータとはまったく違う。大脳の機能は元来、計算することにあるのではなく、生体を導き、バランスをとり、生き続けることを助けることにある」という意見は、極めて重要である。

図Ⅱ－2は、ポパーの「三つの世界」を図式的に表現したものである。上図は、世界をプネウマ（霊）とプシューケー（心・魂）とヒュレー（ソーマ＝物質・身体）の三つに分けたヘレニズム期のヘルメス思想と一見したところよく似ているが、われわれは少なくとも次のことを認めなければならない。即ち、認知・判断・行動には前頭前野からのトップダウン・プロセスが重要な役割を果たしている。このトップダウン・プロセスとは、アリストテレスが「能動理性」として認めたものに他ならず、さらにそれが人間の尊厳を生み出し、人類の文化を推進してきた原動力である以上、その働きに「精神」という特別な地位と名称を与えることに問題があるとは思われない。しかし、ポパーの世界3は、世界1・2との相互作用を営むとしても、存在論的には脳と別種のものである。

図Ⅰ－2. ポパーの三つの世界

これら三つの世界は、矢印で示すように、世界Ⅱを中心にして互に密接につながり合っている。（エクルズ、1989より）